

19世紀ドレーズデンの合唱協会の社会史研究

井上 登喜子

本論は、19世紀ドイツにおける市民の音楽文化活動の一側面を、一地方都市ドレーズデンの合唱協会に焦点をあてることにより考察したものである。合唱協会の一次資料に基づき、レパートリーと演奏機会、会員の社会階層的特性という三つの観点から分析し、三者の関係性を考察することにより、合唱協会の活動を都市市民の音楽生活との関わりの中で読み解くことを目的とする。考察対象は、三月前期にドレーズデン市内に設立された市民層の合唱協会のうち、男声合唱協会リーダーターフェル、混声合唱協会のドライシヒ・ジングアカデミーとシューマン・ジングアカデミーの三団体とした。

考察の結果、これらの合唱協会で歌われた作品は（定着したレパートリーも、消えていった多くの演奏曲目も）、背景にある演奏活動の特性や、参加する人々の社会階層的特徴と無関係ではないことが明らかになった。第一に、混声合唱協会がオラトリオを演奏し、リーダーターフェルが世俗的合唱小品を取り上げたことは、前者がコンサートに重きを置き、後者が演奏機会の目的用途に従って選曲するという「機会音楽」的な音楽演奏に従事したことと関連しており、芸術的要求と結びつく混声合唱協会と、社交的・社会的要求と結びつく男声合唱協会の活動傾向の差異を反映している。第二に、定着したレパートリーは、宮廷楽団や市内の主要教会という伝統的な音楽生活の中心にある「場」や、追悼式という慣習的行為との結びつきを通して生み出されていた。この宮廷楽団や教会という「場」への参加は、会員の社会階層的特徴、つまり上層市民層を中心に構成され、貴族身分も含み、合唱指揮者が宮廷楽長や教会カントルであったことによって決定づけられていた。こうしたドレーズデンの事例は、ある時代、地域の音楽活動を解明するためには音楽作品の価値をめぐる問題だけでなく、音楽演奏をめぐる「場」や「人々」の実態を明らかにする必要があることを示唆している。